東日本大震災から間もなく 10 年。13 日夜にも余震とされる最大震度 6 強の揺れが襲った。復興に向けた人々の歩みは前に進んだのか。被災地を記者が歩き考えました。（5 回連載）

## 第 1 回 双葉病院、50 人はなぜ死んだ 避難の惨劇と誤報の悲劇

朝日新聞福島総局 2021 年 2 月 17 日 配信

静まりかえった雑木林の先にタイル張り 6 階建ての建物が現れた。人の気配はない。聞こえるのは身に着けた防護服が擦れる音とマスク下の自分の息づかいだけだ。私（28）が近づいているのは福島県大熊町にある「双葉病院」。あの日、そばの系列の介護老人保健施設も含め、患者や入所者 436 人がいた。

町内に立地する東京電力福島第一原発が爆発して放射性物質が降り注ぐ中、救出活動は混乱した。全員の避難までに地震発生から 5 日かかり、約 50 人が死亡した。

双葉病院の東病棟。柵の向こうの敷地には背丈ほどある草木が生い茂っていた=2021 年 1 月 23 日、福島県大熊町

救える命だったのでは――。その後の裁判の経過をたどっても、政府の事故調査・検証委員会の報告を読んでも疑問が晴れない。改めて現場に向かった。350 床あり、精神科を中心とした地域最大の病院だった。事故を起こした原発からは南西 4.5km。放射線量が高く、今も立ち入りが厳しく制限される帰還困難区域にある。1 月下旬。町の許可を得て病院を目指した。立ち入りを規制するバリケードの手前で貸与の防護服と線量計を受け取り、案内役の町民男性の車に同乗させてもらった。復興工事のトラックが行き来する大通りからわき道に入って約 200m 先に病院が見えた。わき道はアスファルトで舗装されているが、きれいなのは途中まで。病院に近づくと、路面は色あせ、ひびが入り、盛り上がった跡が残る。男性がつぶやいた。「この先はあと 10 年は人が住めねえよ」 実際に避難指示解除の見通しはまったくたたない。正門は白い鉄扉で固く閉じられている。窓から奥をのぞくと、ぐちゃぐちゃのシーツやペットボトルが散乱していた。震災の 8 カ月後に撮られた新聞の写真で見覚えのある玄関前に、当時は放置されていた多数のベッドはもうなかった。

取材の前に防護服を身につける小手川太朗記者=2021 年 1 月 31 日

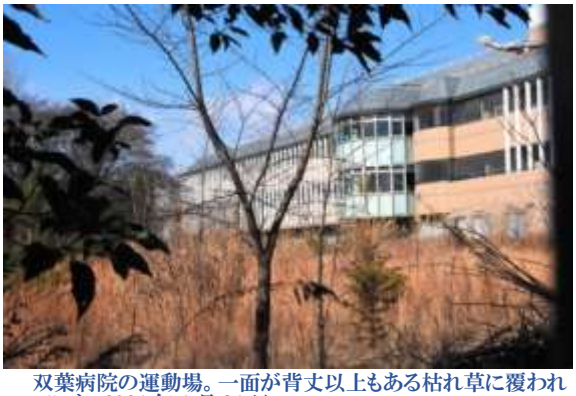
## 「10 年で区切りを」語り始めた関係者

福島に赴任して 2 年目のことだった。私には忘れられない場面がある。一昨年 9 月 19 日、原発事故を巡り、過酷な避難で入院患者らを死亡させたなどとして業務上過失致死傷罪で強制起訴された東電旧経営陣 3 人の刑事裁判で、東京地裁は全員に無罪を言い渡した。判決の行方を見届けようと裁判所前に集まった患者遺族らが、悲鳴をあげて怒るのを現場でみて、やり場のない思いを抱いた。

法廷で問われたのは、津波で全電源を失った原発事故で、病院から避難を余儀なくさせ、多くの患者を死なせた罪だった。事故と死亡との因果関係は争われず、争いの中心は旧経営陣が事故を防げたかどうかだった。災害弱者である患者らがなぜ、犠牲になったか詳しくは分からなかった。私は「実際に病院で何があったのか。話を聞きたい」と、資料や過去の記事を読み、関係者を捜すことにした。ただ、事情を知る人たちは口が重かった。一様に「遺族の気持ち」を理由に挙げた。そんな中、当時、看護副部長だった鴨川一恵さん(66)に取材に応じてもらえた。原発から 10 キロ圏にある浪江町の自宅も避難指示が出た。退職して夫らと暮らすいわき市の自宅で話を聞いた。「20 年以上勤めました。遺族の気持ちを考え、ここ数年は取材は全てお断りしていた。でもあれから 10 年で自分でも区切りをつけたいと思って」

双葉病院の正門へと続く道。病院の手前で色あせたアスファルト舗装に変わり、路側帯の白線は途切れていた=2021 年 1 月 31 日午前 11 時

双葉病院の玄関前のアスファルトからは枯れ草が伸びていた=2021 年 1 月 31 日



双葉病院の運動場。一面が背丈以上もある枯れ草に覆われていた=2021 年 1 月 31 日

福島県大熊町の双葉病院の位置

## 経歴隠して転職する看護師も

10 年前のあの日は地震で停電・断水し、鴨川さんらは懐中電灯やろうそくの灯を頼りに、おむつや点滴の交換をしていた。「目の前の世話で必死で。原発のことなんて頭になかった」夜の防災行政無線の非常放送が状況を変えた。原発から 3 キロ圏に避難指示が出された。翌 12 日朝には 10km 圏に。病院も対象となり、電話が不通で、約 800m 離れた町役場まで行った職員が町側に直談判した。「ストレッチャー100 台が必要」「避難用のバスを病院に」その日の午後、手配された大型バス 5 台にまず軽症者 209 人を乗せ、鴨川さんらほぼ全職員も同乗した。県中部を経て、翌 13 日にいわき市の系列病院に着いた。全員無事だった。

結果的に避難は 16 日まで 5 陣に分かれた。亡くなった約 50 人はこの第 1 陣のバスに乗れなかった患者らだった。政府の事故調査・検証委員会の報告などによると、第 1 陣救出時、重症患者ら 129 人と病院に残ったのは鈴木市郎院長(故人)。系列施設には入所者 98 人と職員 2 人がいた。第 1 陣に同行した鴨川さんは原発事故で病院に戻ることができず、翌 14 日夜に第 2 陣の患者らが運ばれた同市内の県立いわき光洋高校へ向かった。「思い出したくない」と頭に手をやった後、言葉を絞り出した。「バスの扉を開けた瞬間、異臭がしたの」。息絶えた患者がいた。鴨川さんは、どうすればよかったかと考える。「病院に戻れないと分かっていたら、私は残ってた」と後悔を口にした。10 年の節目に貴重な話を直接聞けたが、関係者の口が重い理

由はまだある。「あの誤った発表があったから」と鴨川さん。県が当時、「14 日から 16 日にかけて救出したが、病院関係者は 1 人も残っていなかった」と広報したことだった。

政府事故調の報告書などによると、院長らが病院を離れたのは、14 日午前の第 2 陣を送り出した後で、原発が危険だとする警察の指示で別の場所での待機を余儀なくされたためだった。院長らが病院に戻れない状況のまま、自衛隊による第 3 陣以降の救出となった。患者らを放棄したかのような発表がニュースになり、病院側が批判された。鴨川さんも遺族から怒りの電話を受け、謝り続けた。転職する際、双葉病院で働いていた経歴を隠す看護師もいたという。最終的には県が発表の誤りを認めて病院側に謝罪した。

双葉病院の西病棟。患者たちは 1 階のガラス張りの部屋（右）に集められて救助を待った=2021 年 1 月 23 日

患者らを受け入れた時の様子を振り返る田代公啓・元いわき光洋高校校長=2021 年 2 月 4 日、福島県南相馬市

**「せめてもの供養に…」卒業式の祝いの花**

第 2 陣に対応したいわき光洋高校の当時の校長、田代公啓さん（65）を訪ねた。約 5 年前に定年退職した後、自宅の神社で宮司を務める。同県南相馬市小高区にあるその神社も一時、避難指示が出ていた。平安時代から続くとされる由緒ある神社で、田代さんは今年の正月、避難先から参拝に来る住民らを迎えたという。高校に着いた第 2 陣のバスに乗り込むと、点滴が外され、座席に横たわる患者もいた。「汚物の重さでおむつが外れた方もいた。とにかくバスから早く運び出さないといけないと思いました」。生の言葉で聞くと、私は胸が強く締め付けられた。バスケットコート 2 面分の広さの体育館にシートを敷き、柔道用の畳 109 枚を並べた。患者らは毛布にくるまった。体育館はヒーター6 台を使っても底冷えした。替えのおむつはなく、教室のカーテンを切って代用した。患者は脱水症状や低栄養状態などで衰弱していた。「遺体のそばに花瓶にいれた花を飾りました」花？ 直前にあった卒業式の会場の飾りだった。「お祝いの花だけど、せめてもの供養にと」県と、患者を連れてきた自衛隊との間で、学校で受け入れるのか病院に運ぶのかで右往左往した。過酷な状況での混乱を田代さんは忘れられない。「図面で描いたように人は動かない。それも想定して避難計画を立てないといけない」

**座布団を抱えたまま息絶えていた母**

入院していた母を亡くした遺族の一人、同県川内村の石井芳信さん（76）に会えた。自宅の本棚から一冊のファイルを取り出した。きちょうめんにとじられた 1 枚の書類を見せてもらった。「母の死亡診断書。ここ、見てみ。死んだ日がいつかもわからねえんだ」。指さす欄には「3 月 14 日頃」。長距離の避難を強いられた母を乗せた第 2 陣のバスがいわき光洋高校に着いた日の「頃」だった。母のエイさん（当時 91）の遺体と対面できたのはその 4 日後。「白いシーツにくるまれた遺体が 10 体以上、並んでいた」。病室から持って出て避難のバスに乗ったのか、母は自分の名前の書かれた座布団を抱えたまま息絶えていた。妻が頬ずりし、声を上げて泣いた。石井さんは震災時は村の教育長だった。病院に何度も電話をかけたがつながらない。県中部の郡山市に集団避難して数日後、仙台市に住む弟が「いわきの高校に避難した」と伝えるインターネット上の記事を見つけて、妻と駆け付けた。母は 6 人きょうだいを女手一つで育ててくれた。腰の骨を折って介助が必要になり、震災の

石井エイさんの死亡診断書。死亡日の「3 月 14 日」に続く曜日欄に「頃」と書かれている。時刻は空白だ

双葉病院から避難中に亡くなった母の石井エイさん（当時 91）の遺影を掲げる芳信さん。着ているちゃんちゃんこは形見の着物で作った=2021 年 1 月 20 日

6年前から入院していた。「母の最期を思うとかわいそうで。一緒に避難してやれず、申し訳ねえ」6年前に母の遺影を抱えて四国のお遍路をバスツアーで巡った。「あんな車内で誰にもみとられず。せめてもの供養と思って」。形見の着物で作ったちゃんちゃんこを愛用する。「誰かを恨んで、母が戻ってくるわけでもねえし、病院に責任がないのは分かる。ただ、線香ぐらいあげにきてほしかったなあ。まあ結局、あんな事故はみんな想定外だったんだろう。その場しのぎの避難計画なんてまるで役に立たなかった」

双葉病院付近で撮影する小手川太朗記者=2021年1月31日

石井さんの話を聞いたあと、私は病院の前へもう一度行ってみた。寒さに震えた患者たち、地震から5日かかった救出活動……。忘れてはいけない惨状を思った。各地の原発で再稼働の議論が進む中、再び事故が起きた時、住民の命は守れるのか。荒れ果てた病院が語りかけていると感じた。（福島総局・小手川太朗）

## 第2回 「安らかに眠ってけろ」400年続く巡行神楽、鎮魂の舞

朝日新聞盛岡総局 2021年2月18日 配信

10年前の東日本大震災の時でも中止されることがなかった伝統行事が岩手県沿岸部にあるという。甚大な被害を受けた人々にとって、どんな存在なのか。私（26）は訪ね歩いた。夜の山を歩く。「オオーー」。男たちのかけ声。ほらの音が響いている。昨年 7 月、宮古市。私は神社の儀式の取材に向かった。暑さに蒸され、住宅街から 4km 先の山頂にたどり着いた時は汗だくだった。「黒森（くろもり）神楽」という。「神が宿る」とされる雌雄一対の獅子頭を持ち、布でできた色とりどりの「髪」を振り乱す。踊りは涼しげで厳か。なのに肌がざわつくような迫力。気づくと、周りの人たちと一緒に食い入るように見つめていた。私は奈良育ち。神社仏閣には親近感があり、高校生の頃は年末年始の神社で巫女のアルバイトをした。参道に出店がひしめき合い、参拝客が境内を埋め尽くしていた。ただ、山上の神社はそのときの風景とは対照的だった。「奥が深いから、きっとはまるよ」。かつて先輩に聞いた言葉を思い出した。

黒森神社のご神体を氏子総代会長の家から本殿へ帰す行列。神社の改修工事の間、氏子総代会長宅で預かっていた=2020年7月5日、岩手県宮古市

### 2011年も途切れなかった巡行

神楽は「神をまつるために奏する舞楽」のことだ。神社を信仰する人々の住む範囲を「霞（かすみ）」と呼び、霞ごとに神楽が舞われるようになった。ただ、黒森神楽は大きく様式が異なる。海沿いを約 150km も移動しながら披露する「巡行」をする。ルートは二つ。どちらも海岸線の中間部にある宮古市を出発し、青森県境に近い久慈市まで向かう北回り。ラグビーで有名な釜石市まで行く南回り。これを毎年、交互にめぐる。昔からつながりのある家々の庭先で神楽を舞い、家内安全や無病息災などを祈る。巡行する神楽には沿岸北部の普代村で受け継がれる「鵜鳥（うのとり）神楽」もあり、黒森神楽と互い違いに南北をめぐる。専門家に詳しく聞こうと、宮古市立図書館の市史編さん室を訪

岩手県沿岸部

ねた。一般的な神社なら、社の建て替えなどをのぞき、神さまを本殿から外に連れ出すことはめったにないという。 ところが、假屋雄一郎室長(53)によると、「毎年、神社から遠く離れた土地まで連れ歩く神楽は、極めて珍しい様式なんです」。巡行は 400 年も前から続くそうだ。 震災の日は、巡行を終える「舞納め」の前日だった。到底続けられなかったのでは――。私が聞く前に假屋さんは言った。「途切れませんでしたよ。夏までかかりましたが、権現様を連れて避難所を訪れ、ちゃんと巡行を終えました」

民家の前で権現様が舞う「門打ち」=黒森神楽保存会提供

岩手県によると、震災では関連死などを含めた 5145 人が犠牲になり、1 千人以上がいまだ行方不明だ。そんな惨事に遭いながら、巡行を続けた理由とは何なのだろうか。私は神楽を舞い、お囃子をつける「神楽衆」に会いに行った。

神楽宿の庭先で神楽衆からシットギをつけてもらい喜ぶ子どもたち=2008 年 1 月 13 日

**避難所にできた人だかり**

宮古市から沿岸を走る国道 45 号を南に下った。かさあげされた住宅地が広がる。大槌町吉里吉里地区。「キリキリ」と鳴る砂浜の鳴き砂のアイヌ語ゆかりの地名だ。震災の年に巡行をした平野智さん(31)は、町で居酒屋を営む。元高校球児らしいハキハキとした話し方が印象的だ。3 歳から神楽に親しみ、高校生の時から本格的に黒森の神楽衆に加わった。10 年前は大学生で青森市にいて、3 月 11 日は故郷へ車で戻る予定だった。地震の後、民宿をしている母から「危ないから帰るな」と電話で止められ、そのまま連絡が途絶えた。自宅に津波が来たことはない。今回も大丈夫だろう……。数日後に帰ると、自宅は跡形もなかった。「みんな死んでしまった」と絶望したが、避難所で家族全員と再会できた。「本当にほっとしたんですよ」。平野さんが顔をゆるませ、私も安心した。 2011 年 6 月、宮古市内の避難所で、神楽を披露した。「こんなときに舞っていいのか」と迷いもあった。でも、人々は手をたたいて喜んだ。そして、神が宿る「権現様」と呼ばれる獅子頭に体の悪いところをかんでもらった。「ひざかんでけろ」「腰かんでけろ」。権現様に体をかんでもらう「身固め」は御利益があるとされる。人だかりができる風景は、震災前と変わらなかった。平野さんは「こんなときだからこそ」と考え直したそうだ。 黒森神楽は岩手沿岸の人にとって身近な存在なのだ。ただ、なぜそこまで現代の人々の暮らしに溶け込めるのか。次に私は、巡行の神楽衆の食事や寝床の世話をする「神楽宿」を担う人に話を聞くことにした。

平野智さんの家族。次男の修大くん(左から 2 人目)は自宅に神楽衆が来るのをまだ見たことがない=2021 年 1 月 18 日、岩手県大槌町

「自然には勝てねえ。何かあれば神頼み」

平野さん宅から 5km ほど北へ。山田町船越にある山ノ内という集落に入った。山崎冨美男さん(73)の家は代々、神楽宿を続けてきた。「黒森さんはやっぱり神様だから」。巡行で神楽衆を受け入れるときは、妻の友人にも手伝ってもらい、カキなどを振る舞うのだという。神楽衆は 12 年と 13 年、震災の犠牲者を供養する「神楽念仏」を舞った。本来は家の位牌(いはい)の前で舞うが、行く先々の港で海に向かって祈った。「神楽の音さ聞いて、安らかに眠ってけろ」 津波で 10 人ほどが亡くなった山崎さんの集落でも、13 年に神楽念仏が舞われた。神楽衆はそばの

避難所となった「グリーンピア三陸みやこ」で力強く舞う平野智さん(右)=2011 年 6 月 25 日

神楽宿への舞い込みで権現舞を舞う平野智さん(左)=2008 年 1 月 13 日

船越湾を見渡せる坂の上で、静かに舞った。震災当時、自治会長として集落内の安否確認に追われた山崎さんは「十分に供養もしてやれねえのが、気持ちの整理がついた」と振り返る。山崎さんは漁師で、カキやアワビ、ホヤをとる。漁に使う道具一式を置いていた作業小屋と船が津波で流されたが、数年後から漁を再開した。海は多くの恵みをもたらしてくれるが、荒れていても船を出さねばならないときがある。「人間にはできないことがあるし、自然には勝てねえもん。何かあれば神頼みだ」。日焼けした顔と大きな瞳をまっすぐ私に向けながら、そう話した。四季が移ろい、海の幸を糧にして暮らしていく。「黒森さんが来れば春がくんのす」。神楽の巡行が、山崎さんにとって欠かせない営みなのだろうと思った。床の間には、神楽衆から受け取ったお札が飾られていた。

黒森神楽の神楽宿をしている漁師の山崎冨美男さん（右）に話を聞く御船紗子記者=2021 年 2 月 9 日、岩手県山田町

地元の神に来訪を告げる黒森神楽の一行。平野智さん（左）が権現様を連れている=2017 年 3 月 11 日、岩手県遠野市の遠野郷八幡宮

**「震災に負けなかった」神楽の誇り**

私が盛岡に赴任したのは 18 年春。津波被災地では土地をかさ上げしたり、山を削って造成した高台に住宅地を移転したりする復興事業が進んでいた。海沿いには防潮堤がそびえている。被災当時の様子は想像できない。「防潮堤で守ってもらえているから神楽ができる。でも、海が見えないのはさみしい気持ちもあります」

宮古市から北上した。約 40km 離れた普代村で役場に勤める笹山英幸さん（26）は釜石市出身だが、この村を拠点にして巡行する鵜鳥神楽の舞い手になろうと移住した。 10 年前、釜石の神楽宿も地震や津波の被害を受けた。翌年の巡行は中止する予定だったが、笹山さんの両親が宮司に直談判して巡行が実現した。仮設住宅に散り散りになった住民が集まって笑う様子を見て、神楽の力を改めて感じた。ところが、高校を卒業して普代村に移り住んだ時は、神楽衆が 6 人ほどしかいなかった。「途絶えさせるわけにはいかない」。笹山さんは他の地域から舞い手をスカウトした。過去の映像や文献と照らし合わせ、演目を復活させていった。私は笹山さんの情熱がうらやましくなり、「自分はこれほど熱中できるものがあるかな……」と考え込んだ。今では神楽衆は 14 人に増えた。県外から呼ばれる機会もあり、19 年には神奈川県鎌倉市で公演を開いた。 その間も自然の猛威は地域を襲った。16 年の台風 10 号。19 年の台風 19 号。 笹山さんは言う。「この 10 年で、舞い手の交代や演目の復活など、鵜鳥神楽は大きく変わったけれど、震災に負けなかった神楽をこれからも守り続けていきます」 そして、コロナ禍 「神様はまたきっと来る」 人々の話を聞いて私が感じたのは、神楽はこの地域の人々の暮らしに深く根付き、「当たり前にそこにある」存在であることだ。 大漁でありますように。無事に海から帰れますように。出産、家の新築、亡くなった人の供養……。人々の様々な祈りに合わせ、神楽の種類も多岐にわたる。

「鵜鳥神楽」を奉納する神楽衆の笹山英幸さん（左）。岩手の沿岸で神楽を舞うはずがコロナ禍で中止となり、出発の儀式だけをした=2021 年 1 月 10 日、岩手県普代村

神社でまつる神を獅子頭に下ろす「舞立ち」でショシャ舞を奉納する笹山英幸さん（手前）=2021 年 1 月 10 日、岩手県普代村の鵜鳥神社

神社でまつる神を獅子頭に下ろす「舞立ち」で、鵜鳥神楽の権現舞を奉納した=2021 年 1 月 10 日、岩手県普代村の鵜鳥神社

鵜鳥神楽の権現様=2021 年 1 月 10 日、岩手県普代村の鵜鳥神社

黒森神楽の権現様。巡行中の神楽宿などでは米をついてつくるシットギをかませて休ませる

「鵜鳥神楽」を奉納する神楽衆の笹山英幸さん。岩手の沿岸で神楽を舞うはずがコロナ禍で中止となり、出発の儀式だけをした=2021 年 1 月 10 日

黒森神楽の平野さんの大先輩で「保存会長」を務める松本文雄さん（72）は「生まれてから死ぬまで神楽がある」と教えてくれた。今年、震災の時すら途絶えなかった黒森神楽と鵜鳥神楽の巡行が中止になった。集落はお年寄りが多く、新型コロナウイルスを広めないための苦渋の判断だった。松本さんはアワビを取るさおを手入れしながら、中止について「しょうがねえっぺ」と冷静だった。

コロナ禍のなか、人々が巡行の開催に固執しないのは、私には意外だった。人々は「次を楽しみにしているので大丈夫です」と話していた。神様はまたきっと来てくれる。そう信じる力があるのだ。神楽は、幾度もの災害に見舞われながらも、岩手沿岸で捧げられてきた。津波も海の幸も等しくもたらす、海とともに生きる人々のたくましさが、神楽を後世へつないでいた。来年はきっと、春を届けに来てくれるに違いない。

## 第 3 回　浪江の新聞舗が問う「復興」 三浦記者の同行取材、再び

朝日新聞南相馬支局 2021 年 2 月 19 日 配信

凍りついた路面に、赤や青の警告灯のギラギラした光が乱反射している。 1 月中旬の午前 2 時。運転する車に表示された外気温は零下 1 度だ。 東京電力福島第一原発から北へ約 8km。 原発事故に伴い、福島県浪江町に出されていた避難指示が一部で解除されてから間もなく 4 年になる。放射線量が高いとして町域の 8 割は今も帰還困難区域で、立ち入りが厳しく規制されている。そんな復興途上の町で私（46）が向かう先は「鈴木新聞舗」。避難指示が解除された直後、町に戻ってきた人たちのために所長の鈴木裕次郎さん（37）が 1 人で配達を再開した。約 80 年の歴史を持つ老舗新聞販売所の 3 代目だ。

配達前の新聞を整理する鈴木裕次郎さん=2021 年 1 月 13 日午前 2 時 12 分、福島県浪江町

私は 3 年前、新聞配達を手伝いながら、彼が奮闘する姿を朝日新聞の連載記事に書いた。あれから町はどう変わったのか。当時と同じ視線で原発被災地の変化を確かめてみたい。

刷り上がったばかりの朝刊を抱え、久々に配達用の軽乗用車の助手席に乗り込んだ。「路面が凍っているので気をつけて下さい。僕は先日 3 回も転んじゃいました」と運転席の鈴木さんが笑みを浮かべた。助手席から見える風景は前とは全く違う。変わりすぎていて、どこを走っているのかわからなくなるほどだ。野生動物のすみかになっていた多くの無人の住宅はもうなく、解体された跡地に空き地が広がる。当時は住宅から突然イノシシが飛び出してきて、私の車にぶつかってバンパーが壊れたこともあった。新しい商業施設がライトアップされている。一昨年 7 月に町役場近くに開店したの

復興工事が続く福島県浪江町中心部。暗闇の中に青と赤の警告灯が光る=2021 年 1 月 13 日午前 2 時 35 分

は「イオン浪江店」。町唯一のスーパーだ。昨年 8 月には地元産品などを売る「道の駅なみえ」もできた。その駐車場には運転手が仮眠を取る復興工事のトラックが並ぶ。隣で運転する鈴木さんが教えてくれた。「移住者のほとんどは廃炉や除染の作業員です。町の未来は依然、見えないままなんですよ」

2019 年夏に福島県浪江町役場近くにオープンしたイオン浪江店。町内で唯一のスーパーマーケットだ=2020 年 2 月 20 日

**「裕次郎の新聞は、温かい」**

避難指示が一部で解除されてからしばらくたった頃。仮設住宅で避難生活を送る町民が、故郷でたった 1 人で新聞配達をしている 34 歳の青年がいると私に教えてくれた。当時扱っていた新聞の部数は全国紙や地方紙など 85 部だった。ただ配達区域が広く、1 人だと午前 2 時半から午前 6 時までかかる。ほかに従業員はおらず、休めるのは月に 1 度の新聞休刊日だけ。私は鈴木さんに電話をかけ、「配達を手伝わせていただけませんか」と申し出た。地域を網羅する新聞配達を通じ、原発事故の実情も見てみたかった。

福島県浪江町付近

以後、私は約半年間、週に 1 度のペースで配達を手伝った。東京の JR 山手線内を少し狭くしたくらいの区域のうち、私は沿岸部や隣の双葉町の事業所などを担当した。部数の多い町の中心部は鈴木さんが回った。怖かったのはタイヤのパンクだ。津波に見舞われた海沿いの道路は凸凹で、復興工事のトラックから落ちたらしい木片などが路上に転がっている。パンクしても助けを呼べず、周囲が暗くてタイヤの交換さえままならない。読者が朝刊を手に取る時間に間に合わなくなる。「1 人でも配達員が雇えれば、楽になるんですけれどね」と鈴木さんはよくこぼしていた。 時給 1500 円で募集しても応募はゼロ。ハローワークには、わずかな帰還者を奪い合うように、廃炉や除染関連の高給の求人が並んでいた。経営は極度の赤字だ。再開直前、先代で父の宏二さん（77）が「成り立たない」と猛反対した。収益の柱は折り込みチラシ。人口約 2 万 1 千人の町で、役場は 1 千人が帰還すると予測していたが、実際は誰にもわからない。スーパーや飲食店の再開も見込めないのに、チラシの依頼がどれだけあるのか、と。

配達の準備を終えた鈴木裕次郎所長（左）と話す三浦英之記者=2018 年 1 月 1 日

配達に向かう鈴木裕次郎さん。外は漆黒の闇だ=2021 年 1 月 13 日午前 2 時 17 分

それでも、鈴木さんが再開したのは、帰還者の多くは高齢者で、メールやインターネットが苦手な世代だからだ。情報源として新聞は役に立てる。高齢者さえ戻ってこられないなら、浪江町は復興の足掛かりを失う、と。月に 1 度の新聞代の集金に同行したとき、70 代の女性が私に話してくれた。「戻ってこられたのは、裕次郎のお陰だわ。裕次郎の新聞はね、こう、温かいのよ。配達してくれる彼の姿を思い浮かべながら毎朝、読んでいるわ」

新聞を抱えて小走りにポストへと向かう鈴木裕次郎さん。路面は凍っていた=2021 年 1 月 13 日午前 2 時 28 分

**巨額の復興予算、誰がために**

避難指示の一部解除から 4 年。東日本大震災と原発事故から間もなく 10 年になる。住民も徐々に戻り始めている。2018 年春に約 500 人だった居住者は、いまは約 3 倍の約 1600 人に増えた。小中学校やこども園が新たに開校し、約 50 人が通う。鈴木さんも南相馬市の災害公営住宅から新聞舗に併設された住宅に引っ越し、妻や子ども 2 人と一緒に暮らしながら配達している。

手伝った新聞舗も様変わりした。作業場では 20 代の女性が配達に備えて新聞を仕分けしている。廃業した隣の南相馬市の同業者からの移管もあり、部数は約 550 部と 6 倍以上になった。配達する従業員も 20～60 代の 4 人に増えた。鈴木さんも週に数日は休めるようになった。ただ、経営の厳しさは変わらない。予想もしなかったコロナ禍で、折り込みチラシはほとんど入らない。「少しずつですが、復興してきているのを感じています。それはとてもうれしいことです。でも……」と鈴木さんは言葉を詰まらせた。

配達前の新聞を整理する鈴木裕次郎さん（右）=2021 年 1 月 13 日午前 2 時 12 分

町には昨今、巨額の復興予算が流れ込んでいる。車で沿岸部を走ると、かつてフェンスで囲まれて入れなかった東京ドーム 5 個分の広さの荒野に、黒い太陽光発電のパネルが敷き詰められている。 昨年 3 月、国が再生可能エネルギーの利用を掲げて完成させた「福島水素エネルギー研究フィールド」だ。事業費約 200 億円をかけ、世界最大級の水素製造装置を備える。その隣では町が 24 年度までに「復興牧場」を整備する。 約 1300 頭の乳牛の飼育や新規就労者の研修をする施設で、費用は約 100 億円と見積もられている。県は周辺の原発被災地と同様に、5 年間居住などを条件に町内への移住者に最大 200 万円、起業した事業者に最大 400 万円を支給する計画を新年度から始める方針だ。鈴木さんは言う。「復興政策はどこか的が外れている感じで、被災地域で暮らす人々のためになっているとはどうしても思えないんですよね。まだ町域の 8 割が帰還困難区域で、9 割の町民が戻れていない。新しい事業はほとんどが町外の企業や新住民のためのものでしょう？」

福島水素エネルギー研究フィールド。水素の製造装置がある建屋（中央）の周囲には太陽光発電用パネルが敷きつめられている=福島県浪江町、東芝エネルギーシステムズ提供

復興工事が続く福島県浪江町中心部。暗闇の中に青と赤の警告灯が光る=2021 年 1 月 13 日午前 2 時

**「孤独死を防ぐ」集金スタイル**

そんな状況の中で、鈴木さんがこだわっている仕事の流儀がある。新聞購読者には銀行振り込みやクレジットカードでの支払いを求めるところが多いが、鈴木さんは特に一人暮らしなどの単身者宅は一軒ずつ回り、戸別集金を続けている。「孤独死を防ぎたいんです」 震災後、避難指示で配達先がなくなったため、東京都内の同業店でアルバイトしていた。郊外の集合団地で、配達の度に郵便受けに新聞がたまり、換気扇にハエが群がる部屋に気付いた。高齢者が孤独死している現場だった。町の社会福祉協議会によると、町内に帰還した町民の高齢化率は 7 割。見回りを担当する約 940 世帯のうちほぼ半分が一人暮らしだ。昨年 5 月、町から避難した先の隣接市の災害公営住宅で孤独死した 60 代の人もいた。「せっかく浪江町に帰っても、誰にも気づかれずに亡くなるなんてことがあったら……。あまりにも悲しすぎるじゃないですか」配達が終わりかけた午前 5 時半、東の空が白む。復興工事の警告灯が輝く国道をトラックが行き交う。帰還困難区域の入り口では夜間も警備を続ける人がいる。 運転席で鈴木さんが言った。「復興って自然に進むものじゃないんですよね。必死に前に進めようと努力する人がいて、ちょっとずつ前に進む。日本で暮らす多くの人に、僕はそれを忘れないでいて欲しいと思います」

配達の車に乗り込む鈴木裕次郎さん=2021 年 1 月 13 日午前 2 時 23 分

鈴木裕次郎さん（左）と三浦英之記者=2021 年 2 月